

すでに案内をしていますように、今日から「信仰の継承」というテーマで、12月の最初までメッセージを語っていきます。皆さんは、「信仰の継承」と聞いて、どういうことを考えられるでしょうか？それは、この教会の歴史や伝統、文化といったものを受け継いでいくことですか？また、私たちの教会は北米ホーリネス教団に属していますが、その100年近い教団の歴史や歴代の牧師たちが強調してきたことを次世代に語り継ぐこと、それが私たちをして信仰を継承するということでしょうか？

神様は、それぞれの教団や地域教会にユニークさを与えておられます。そして、それらも大切にすべきもの、次世代に受け継いでいって良いものだと思います。ただそれらが、聖書を通して教えられていること、つまり、主の御心よりも重んじられる時、それは決して健全なこととは言えません。なぜなら、主イエスに敵対し、また主ご自身も弟子たちに気をつけるようにと注意されたユダヤの指導者たちは、先祖の言い伝えや教えといったものに固執したゆえに、本当は彼らこそ主を迎えるべき人たちでしたが、彼らは主を十字架にかけて殺してしまったからです。

では私たちにとって、健全な信仰の継承とは、どういうものでしょうか？どのようにして自分たちに与えられたこの恵みの信仰を、人々に、特に次世代に受け継いでいけば良いのでしょうか？このシリーズでは、私たちが信仰の継承に取り組むにあたり、心に留めておくべきことを、みことばから学んでいきたいと思っています。そして、それらは決して初めて聞くようなものではありません。むしろ、これまで学んできたことを復習する形になると思います。そこで今日は、まずそれが「主の約束による」ということを見ていきます。

申命記 6:6-7「私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。7 これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。あなたが家にすわっているときも、道を歩くときも、寝るときも、起きるときも、これを唱えなさい」。神様は、このようにしてモーセを通して、ご自分がどのようなお方で、どのようにして民を導かれたのか、また主を愛し、そのおきてを心に刻むことをイスラエルの民に命じられました。それだけではなく、彼らがそのことを自分たちの子どもにもよく教え込むよう、主は命じられたのです。

このことは、今日も変わりません。つまり、神様は、今日も主を信じる私たちに、まず私たち自身が主を愛し、その教えを心に刻むことで、主に聴き従うこと、そして自分たちの子どもにも、そのように教えることを使命として与えておられるのです。ただそこで注意したいのは、私たちにとっての子どもとは、必ずしも血縁関係におけるわが子だけを意味しません。使徒パウロが、テモテをわが子のように愛し、彼を養い育てたように、私たちは、教会の子ども達、つまり、信仰の家族である兄弟姉妹に対して、また彼らの子どもたちに対して、そのような大切な役割を負っているのです。

私自身、このクロスウェイ教会を通して、主イエスへの信仰へと導かれましたが、それは、礼拝や家庭集会を通して、主の福音を聞くことができたからです。でもそれは、ただ耳で聞いたからだけではなく、ここにおられる兄弟姉妹たちを通して、主の愛を見える形で体験することができたからだといえます。そして、その愛の実践は、今日も続けられ、その中に私自身の子も達も含まれていることに感動を覚え、主の御名をあがめています。主に感謝すると共に、皆さんにも心から感謝しています。

少し前置きが長くなりましたが、もう一度、今日の箇所を読みます。3:16「ところで、約束は、アブラハムとそのひとりの子孫に告げられました。神は『子孫たちに』と言って、多数をさすことはせず、ひとりをして、『あなたの子孫に』と言っておられます。その方はキリストです」。

ここでは、神様が、アブラハムとその子孫に与えられた「約束」について語られています。その約束とは、創世記の初めで、アブラハムを選ばれた神様が、彼を大いなる国民とし、祝福とする、というものでしたが、それが、なかなか実現に至らなかったのです。アブラハムには、子がなかったからです。彼が大いなる国民となるには、一人でも子孫が必要であったわけですが、彼も彼の妻サラもすでに年老いていました。そこでアブラハムが考えたのが、サラに仕えるしもべハガル、つまり、子を産むことのできる彼女によって、主の約束を実現させるというものでした。そして、彼らは実際に子を授かります。イシュマエルのことです。

では、そのイシュマエルが、主の約束された祝福を受け継ぐ者となりましたか？いいえ。彼が生まれて13年が経った後、神様は再びアブラハムに現れることで、彼の妻サラから生まれる子、つまり、イサクによって、その祝福は受け継がれると語られたのです。神様は、なぜアブラハムの最初の子イシュマエルではなく、イサクを、約束の祝福を受け継ぐ者とされたのでしょうか？それは、彼が神様の約束によって生まれた者だから、つまり、そのことが神様の選びと約束に基づいていたからです。ただそのことは、アブラハムにとって、実に理解し難いことでした。そのことを聖書から見ることができます。

創世 17:15-19「また、神はアブラハムに仰せられた。『あなたの妻サライのことだが、その名をサライと呼んではならない。その名はサラとなるからだ。16 わたしは彼女を祝福しよう。確かに、彼女によって、あなたにひとりの男の子を与えよう。わたしは彼女を祝福する。彼女は国々の母となり、国々の民の王たちが、彼女から出て来る。』17 アブラハムはひれ伏し、そして笑ったが、心の中で言った。『百歳の者に子どもが生まれようか。サラにしても、九十歳の女が子を産むことができようか。』18 そして、アブラハムは神に申し上げた。『どうかイシュマエルが、あなたの御前で生きながらえますように。』19 すると神は仰せられた。『いや、あなたの妻サラが、あなたに男の子を産むのだ。あなたはその子をイサクと名づけなさい。わたしは彼とわたしの契約を立て、それを彼の後の子孫のために永遠の契約とする。…』」。

このようにして神様は、イサクを、ご自分がアブラハムに対してなされた祝福の約束を受け継ぐ者とされました。そして、主が語られた通り、サラは超高齢にしてイサクを身ごもり、彼を出産したのです。実に奇蹟としか言いようがありませんが、神様は、このようにして約束の子孫としてのイサクをアブラハムに与えられました。そして、そのイサクを通して、アブラハムへの祝福が実現へと至る道を自ら備えられたのです。

ところが、イサクが成長した時、神様は、その約束の子を全焼のいけにえとしてささげるよう、アブラハムに命じられます。創世記 22 章のところですか。その 1 節を見るとこうあります。「神はアブラハムを試練に合わせられた」。この箇所は、これまで実に多くの人に神様への疑問を抱かせてきたところだと思います。「神様は、なぜそんなことを命じられたのか」と。でも注目したいのは、神様に対するアブラハムの従順さです。主に告げられた通り、彼はイサクを連れてモリヤの地に行き、そこで刀を取って彼を殺そうとします。

その時です。主は御使いを通して、アブラハムにストップをかけられ、こう語られます。創 22:12 「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた」。こう言って神様は、自ら雄羊を備えられることで、イサクではなく、その雄羊をアブラハムにささげさせます。この主のことばからわかるように、神様がアブラハムを試された理由、それはアブラハムが神様を恐れること、つまり、その約束の子イサクよりも、約束を与えられた神様ご自身を愛することを知らなかったのです。

へブル 11:17-19「信仰によって、アブラハムは、試みられたときイサクをささげました。彼は約束を与えられていましたが、自分のただひとりの子をささげたのです。18 神はアブラハムに対して、『イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる』と言われたのですが、19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできる、と考えました。それで彼は、死者の中からイサクを取り戻したのです。これは型です」。

神様は、このようにしてひとり子さえ惜しまず、命じられた通りに行おうとしたアブラハムをご自分の友と呼ばれました(ヤコ 2:23)。なぜなら、このことを通して、ご自分がやがて人類のために行おうとしておられることを示されたからです。つまり、アブラハムがわが子をささげたように、神様は、ひとり子の主イエスをささげられることをすでに計画しておられました。彼の身代わりの死、その十字架による贖いの死によって、私たち罪人を罪と滅びの中から救い出すためです。

ですから、私たちは知っています。アブラハムは、神様に命じられた通り、イサクに手をかけて彼を殺そうとしました。けれども、実際には、彼を殺さずに済んだのです。なぜなら、神様がアブラハムに求められたもの、それはイサクのいのちではなく、ご自分に対するアブラハムの献身であったからです。ですから、このようにして死を逃れたイサクは、父アブラハムへの祝福の約束を受け継ぐ者となりました。そして、その約束は、イサクを通して、彼の子ヤコブに引き継がれていったのです。

ではどうですか？その後は、誰によって主の祝福の約束は、受け継がれていったのでしょうか？ヨセフですか？そして、その後は、モーセですか？話の流れからすると、そう行きたいところですが、実は、その約束は、ヤコブの子の一人、ユダによって引き継がれます。というのも、彼の子孫として、やがてダビデが生まれ、そのダビデの子孫として、主イエスが誕生されたからです。マタ 1:1にこのように書かれてある通りです。「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」。

神様をして、アブラハムに「あなたの子孫によって地のすべての国々は祝福を受けるようになる…」(創 22:18)と約束された、その「子孫」とは、実に主イエスのことでした。なぜなら、主イエスを信じる者はみな、何人であるとか、その国籍に関わらず、主につくバプテスマを通して、主イエスと一つにされるからです。そして、約束の子孫である主イエスと一つにされるなら、その人もまた、アブラハムの子孫となるのです。それゆえに、アブラハムに約束された祝福を受け継ぐ者とされます。私たち信仰者が、この世の血縁関係を超えて、互いを神の家族というのは、そのためです。私たちは主イエスと一つであるゆえに、互いに対しても一つの存在、つまり、キリストをかしらとした、そのからだとされています。

主イエスは、このご自分のからだとしての教会、つまり、私たちを愛するゆえに、終わりの日に再び戻って来られ、その救いを完成して下さいます。私たちを完全に贖って下さるのです。「信仰の継承」ということを考える時、私たちは、それが何よりも、主の約束によるものであることを覚えたいと思います。「私たち」からではなく、それは「神様」(主)から始まるもの、始まったものです。主が、私たちを含むすべての国民を祝福することを望まれるゆえに、主は、アブラハムというひとりの人を選び、また彼の後の子孫として、御子イエスをこの世に遣わして下さいました。御子の十字架の死、また復活によって、彼に救いの望みを置くすべての者が、神様の祝福としての永遠のいのち、そして、天の御国を受け継ぐ者となるためです。

昨日、矢倉妙子姉の告別式が教会で行われました。このようにして、また一人、私たちは信仰の家族を主の許へと送ったわけですが、やがては私たち自身もみな、主の許へと召されて行くのです。そして、その日がいつであるかは主の他にはわからないわけですが、それだからこそ、今日という日、まだ福音を語る機会が与えられているうちに、主イエスとその救いを人々に伝えていきたいと願うのです。それは決して容易なことではありません。忍耐が問われます。でも、それがこの世での一時的なことではなく、人々の永遠に関わることであるゆえに、私たちは主の約束を信じ、またみことばと御霊の助けをいただきながら、約束の子孫である主イエスのことを人々に、特に自分たちのまわりにいる人々に宣べ伝えていこうではありませんか。